千葉大学附属図書館亥鼻分館

行方 美知子

千葉大学附属図書館亥鼻分館の発足と発展

亥鼻分館前史（一）

── 公立千葉病院～旧制千葉医科大学 ──

過去に発行された医学部85年史，同100周年記念誌においては図書館を語る頁がありませんでした。今回，医学部135周年記念誌の刊行に際し，医科大学図書館，医学部図書館等の名称で医学部と深く係わりながら活動を続けてきた図書館について紹介する機会を与えていただいたことに感謝いたします。

亥鼻分館のルーツは，明治13年公立千葉病院（医学教場を附設）に病院長兼教頭として赴任した長尾精一先生の功績に求めることができます。長尾先生は，同病院が県立千葉医学校，官立第一高等学校医学部，千葉医学専門学校と変遷していく間，校長として在職されました。その在職20年を記念し明治33年に「長尾文庫」という独立した60坪の図書館が建設されました。医学図書館の嚆矢です。「医学部85年史」の医専時代Ⅰでは，明治36年当時の千葉医学専門学校建物配置図において，玄関付近に図書室が既に設けられ当時外科学の三輪徳寛教授が図書主幹をされたとの記録があります。その後，大正15年には，千葉医科大学附属図書館が設置されて図書館運営に必要な「千葉医科大学附属図書館規程」「附属図書館閲覧細則」が明文化され，医科大学附属図書館には本館（医科大学本部内）と分館（病院内）を設置し本館には医科大学附属図書館長，分館には分館主任を配置し，図書委員会を設け図書館の予算，図書の購入，規程の改廃等を審議していました。以後，その基本姿勢は後の亥鼻分館に脈々として受け継がれています。初代の館長には，福田得志教授（薬物学）が補せられました。

昭和２年頃に職員として勤めた方の話によると，当時は現在の病院玄関前に木造の千葉医科大学事務局本部があり，その２階に医科大学附属図書館（本館）があったとのことです。書架の図書は金網に囲われており，利用者は閲覧したい図書を見つけたら先ずベルを押し事務室にいる職員を呼びます。そして読みたい図書の背表紙を金網越しに押し，中にいる職員がそれを取り出して渡すという出納方式をとっていたそうです。当時の利用者であった桑田次男氏（名誉教授・微生物学）の回想として，千葉医科大学に来てみて独立した図書館でなかったこと，10数人はいれば一杯になってしまう貧弱な図書館であったことに失望したことが亥鼻分館発行「ゐのはな10」に述べられています。

昭和19年頃には，太平洋戦争下で千葉市にもアメリカによる空襲があり，空襲警報が鳴ると職員は，今桜並木となっている連絡道路下の防空壕に学生と一緒に避難しました。また，図書館所蔵図書の一部は，長野県下伊那郡大下条村に疎開させることにより焼失をまぬがれました。このように，大正12年の関東大震災，昭和19年頃の空襲をくぐり抜けてきた大切な図書資料が現在へ引き継がれてきたことは，当時の図書館職員のたゆまぬ努力と大変な苦労のたまものと思われます。

亥鼻分館前史（二）

── 新制千葉大学と医学部分館 ──

昭和24年５月に新制千葉大学が発足し，旧制千葉医科大学は千葉大学医学部となり，附属図書館は医学部分館と改称されました。名称は変わっても図書館の活動は継続され，戦後は年々増え続ける蔵書を配架するための施設作りが急務となりました。昭和34年頃には，基礎医学新館が完成して全教室が移転し，図書館だけがその地に残されました。そのため，緊急な要件への対応は電話だけであり，学生，研究者に与えた不便は計り知れないものがありました。

昭和46年に医学部分館の新営第１期工事として，地上２階1,128㎡の建物が建設され，閲覧関連施設

写真1：昭和55年頃の医学部分館（後の旧・亥鼻分館）

及び事務室として利用されました（写真１）。閲覧環境は医科大学当時とは大きく異なり，ほとんどの図書資料が開架書架に配置され，利用者が自由に図書に触れて利用できる環境になりました。当時の利用者であった橘正道氏（名誉教授・生化学，第五代亥鼻分館長）は，昭和43年当時取り残された図書館へは800ｍ離れていたため，競争の激しい専門領域の研究ではひと時も無駄に出来ないと，自費で自転車を購入し図書館通いをしたこと，その後新営された医学部分館の利用環境にとても感激したことを覚えているとおっしゃっていました。この建物は，現在，厚生施設（学生食堂）として使われています。本来は，第２期工事として書庫が建つ予定でしたが実現されないままになりました。そのうち，亥鼻キャンパスに，昭和50年４月看護学部図書室，さらに昭和52年10月に生物活性研究所（習志野市より移転）図書室が設置されました。研究領域が近い３部局がそれぞれの図書館（室）を持つことは，財政的，機能的に問題であるという指摘もあり，それらが統合した生命科学，医科学分野を包括する複合図書館を目指すことになりました。こうした学内事情の他に，当時の生物医学関係を中心とした学術情報量の飛躍的増大という学問的状況の変動から，亥鼻地区の情報センターとしての役割が期待され，学術情報の効率的な収集と集中化を目指した『医学生物情報図書館』構想が発案，検討されることとなりました。

亥鼻分館の設置

こうした状況の変化と新構想に基づき，昭和53年４月には，亥鼻地区４部局（医学部，看護学部，生物活性研究所，附属病院）の複合分館として亥鼻分館が組織上で発足しました。組織的には医学部から離れ，附属図書館（西千葉）の傘下になりました。亥鼻分館発足時の事務組織，設備及びサービスは以下のようなものでした。

【事務組織】　組織として医学部から離れ附属図書館亥鼻分館となることは単に名称の変更だけではなく，使っている机，椅子も管理する部局名が変わるため全て管理換物品として分館の物品管理簿に登載し直さなければなりません。総務係の苦労は大変なものでした。この時の事務組織は，初代分館長に萩原彌四郎教授（神経薬理学）が就任され，事務長，総務係，整理係，閲覧係からなっていました。

【設　　備】　発足当初は前述の書庫が未完成のまま組織と名称が変わっただけでしたので，図書を集中管理するということができませんでした。書庫がないため，医学部の貴重図書である東洋医学古医書コレクションも一時，西千葉の附属図書館本館に保管を委託することになりました。また研究用図書は，各図書館（室）に分散配架の状況が続くことになります。収納スペースの改善が図られたのは，昭和56年旧医学部基礎棟が合同校舎として改修され，その一部1,854㎡を仮の書庫として使用できるようになった時です。分散管理されていた約８万冊が合同校舎に配架できることになり保存機能が実現しました。しかし，元が教室や研究室であったため，書架を並べて置くには床の耐荷重が不足していましたので一部屋に数台しか設置できず書庫としては利用しづらいものでした。閲覧座席について言えば，当時の利用対象者2,500人に対してわずか57席でした。

【サービス内容】　分館発足時をサービス面から見ますと，昭和51年度から開始されていた，教室単位に到着雑誌の目次情報をコピーして提供するコンテンツ・サービスが挙げられます。既成の目次情報と異なり，分館及び各研究室に到着した雑誌の目次ですから，本文が手近かにあるという情報をも伝える便利なサービスでした。

医学図書の分類は，当初BMLC（Boston Medical Library Classification 1925）の日本語版を採用していましたが，新しい医学領域に充分対応できていないという理由から，米国国立医学図書館の分類表NLMC（National Library of Medicine Classification）を採用することになりました。新しい分野の図書に詳細な分類が与えられたことにより，利用者にとって求める図書が探しやすくなりました。組織的な変革はあったものの建物は旧来のものを使った亥鼻分館の船出です。

亥鼻分館の新営

手狭になっている分館の状況を憂慮するとともに，学内の医学情報センター機能の充実を図りながら利用者に快適な学習・研究環境を提供しようという新図書館構想が昭和56年度から検討され始めました。この構想の具現化には長い年月がかかりましたが，学内の理解を得て概算要求を提出することとなり，ついに平成７年度の施設概算要求が認められ，平成８年７月には，当時において考えられる最高水準と言われる図書館が建設されました（写真２）。全学の関係者一同が待ち望んだ地上３階，地下１階，延3,784㎡，閲覧席218席の亥鼻分館の新営です。新営された分館は，医学，生命科学，看護学等

写真2：平成8年に新営された亥鼻分館

写真3：受付カウンター

の学問分野における研究及び学習の支援，国際化への対応，地域医療への支援，展示・博物館機能などが盛り込まれた図書館を目指していました。フロアレイアウトとして，地下１階と地上１階が研究フロア，２階は学習フロア，３階は卒後・生涯学習および地域医療サービスフロアとなっている建物の概要を紹介します。

【設 備 面】　正面入口に伸びるスロープの両側には皐月が植樹され，やさしい景観の中に玄関があります。曲面を活かした正面玄関には“Library of Health Sciences”と英文名称が掲げられています。１階フロアは（写真３），受付カウンター，利用度が高い洋雑誌，新着雑誌コーナー，展示コーナーがあり，さらに情報検索コーナーは受付カウンターと密着させて配置し，館員がいつでも利用者に対しフォローできる体制を作っています。２階フロアは（写真４），学生のための図書，参考図書を配架，視聴覚ブースも設置して最新の医療情報をビジュアル的に学ぶことができます。また，３名以上で利用するグループ閲覧室もあり，その利用頻度は非常に高くなっています。２階にも情報検索用PCが配置され，窓側にはゆったりとした閲覧スペースがとられています。さらに３階に上がると，地域医療サービスコーナー，１人用閲覧机，学内研修や講演会等に利用されるライブラリーホール等が設置されています。地階には，和雑誌が配架され，窓に沿って閲覧席が設けられています。建物が斜面を利用して建てられているため，地階窓側の閲覧席からは，町並みの景観が見られ開放感あふれる空間を創り出しています。また，全て電動集密書架を配した書庫もその奥に設置されています。

全館の設備面で特徴的なのは，七宝焼きを飾った壁や玄関吹抜け天井には人体の動脈，静脈を模したステンドグラスといった装飾が施されており，色と光のハーモニーを醸しだしていることです（写真５）。

写真4：明るく広い閲覧室

写真5：1階吹き抜け

亥鼻分館の発展

新営となった亥鼻分館も10年以上が経過した現在，学術情報環境の大きな変化もあり，それに伴う図書館活動もまた変革を求められています。雑誌は紙媒体の資料からネットワーク環境を利用した24時間利用可能な電子資料にとって代わられる時代になりました。図書館職員を介さないで利用できる資料が増え続けています。こうした利用環境により，インターネットPCがあれば，図書館に行かなくても

利用できるサービスが増えました。自宅から電子ジャーナルが利用できるようになると図書館の役割は，見えにくくなるという一面はありますが，それらの利用環境を整えることも図書館の重要な仕事になっています。

しかし，こうした情報社会の中で，図書館における学習環境の整備は，さらに必要性が高まっていますし，利用者からも期待されています。具体的には，平成13年度に設置された英語学習用CALL端末の設置により語学の自学自習が可能になり，平成15年度には，情報リテラシー教育用に１人１台のノートPCを使った情報データベースの検索実習ガイダンスが実施されたことを挙げることができます。平成21年度には，図書館のWebページから，図書の貸出予約，貸出期間の延長，他館からの文献取寄せの申込などが24時間利用できる環境が整備されました。

最新の情報とは別に亥鼻分館には，「東洋医学古医書コレクション」という誇るべき資料が残されています。平成20年度には，樋口誠太郎氏（日本医史学会評議員）を中心とする献身的なご尽力により「千葉大学附属図書館亥鼻分館古医書コレクション目録」が出版され，さらに古医書の何点かは，本文を電子化し，図書館のWebページで一般公開する事業も進めています。電子化に関して言えば，昨今の図書館は，情報の収集だけではなく，大学の研究成果などを世界に発信する機能（機関リポジトリ，千葉大学ではCURATORと命名しています）も備えています。

こうした情報化社会において図書館は，何時でも何処からでも利用できる環境を作るという利用者に対する研究支援・学習支援機能がさらに求められていくことでしょう。また，所蔵する資料等を通じて地域貢献・社会貢献の役割も果たしていく必要があります。しかし，一方では学生に対するサービス，すなわち学習の場を提供し，自学自習を支援する役割を忘れてはなりません。この課題は今に始まったことではなく，昔から図書館機能の第一に利用者，とりわけ学生への支援を考え，それをどのように実現するかを熟慮しながら分館は運営されてきました。このことの経過は開館時間の推移に表れています。

昭和47年度，平日9：00～19：00・土曜日9：00～16：00；昭和53年度，平日9：00～20：00・土曜日９：00～16：30；昭和55年度，日曜日も13：00～17：00（平成４年度に完全週休２日制により一旦，土曜日は13：00～17：00に変更，日曜日は休館）；平成11年度，平日9：00～21：45；土曜日12：30～18：00；平成19年度，土曜日・日曜日が10：30～20：00；平成20年度，土曜日・日曜日・祝日が10：30～20：00。

以上の推移は，利用者ができるだけ長く図書館で学習できるように考えてきた結果です。また，開館時間内での利用が困難な亥鼻地区の医療関係者，研究者に対して，緊急時の必要性から閉館時の24時間特別利用も昭和56年度から実施しています。

事務組織では，平成11年度に事務長制が廃止され本館に事務を一元化し，専門員（週２日），２係体制，平成18年度には専門員（常駐），１係体制へと変化しています。

これまでの亥鼻分館の歴史について述べてきましたが，分館がここまで発展したのは多くの先人の真摯な努力によっていることは申すまでもありません。歴代分館長，初代：萩原彌四郎（昭和53.4.1～57.3.31），二代：林豊（57.4.1～61.3.31），三代：降矢震（61.4.1～63.3.31），四代：本田良行（63.4.1～平成 2.3.31），五代：橘正道（2.4.1 ～ 8.3.31），六代：嶋田裕（8.4.1～12.3.31），七代：安達恵美子（12.4.1～15.3.31），八代：関谷宗英（15.4.1～17.3.31），九代：瀧口正樹（17.4.1～）はいつの時代も亥鼻分館に愛情を注いでくださいました。

また，この間の亥鼻分館事務長（後に専門官，専門員）は櫻木茂（昭和53.4.1～55.3.31），江口元（55.4.1～58.5.31），谷島良治郎（58.6.1～60.3.31），峰岸茂（60.4.1～61.3.31），笈田定（61.4.1～63.3.31），大野一郎（63.4.1～平成2.3.31），多田隆幸（2.4.1～3.3.31），鴇田英夫（3.4.1～4.3.31），川島友三郎（4.4.1～5.3.31），早瀬豊（5.4.1～7.3.31），高橋一郎（7.4.1～9.3.31），鈴木賢治（9.4.1～11.3.31），専門員：青木公男（11.4.1～12.3.31），長友良維（12.4.1～14.3.31），五十嵐裕二（14.4.1～20.3.31），行方美知子（20.4.1～21.3.31），江波戸登弥子（21.4.1～）でした。

私たち亥鼻分館職員は，こうした先人の努力に感謝しつつ，今後も利用者のための図書館造りに邁進するつもりです。

最後に本稿を作成するにあたりご協力いただきました橘正道先生，石出猛史先生，五十嵐裕二様の皆様に厚く感謝いたします。

（なめかた みちこ）